

---

# エクスタシー

中井千晶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エクスタシー

### 【NZコード】

N1503A

### 【作者名】

中井千晶

### 【あらすじ】

エクスタシーという麻薬…それにはまつていく人間達をリアルに  
かいた小説

## 神様との出会い

ある人は、快樂を求めて人格を壊した。

それは二年前の冬の出来事。

優介という青年にであった。

私は遊び友達の由美と街をふらふらしていた。

金のない私たちは、暇な時はこうやって一人で歩き回る。

『ねえ！ そこの女の子～！ 暇なら遊ぼうよ～！』 由美は私についていくか行かないかの合図をした。

由美はついていく合図だった。

私もついていきたかったので、首を縦にふった。

四人でふらふらとマチを歩きながらたわいもない会話で盛り上がっていた。

ナンパ男の二人は、まるで昔からの友達の様に話やすかつた若い二人組の男が声をかけてきた。

私は由美と顔をみあわせて、いつもの様についていくかついていかないかの合図をした。

私も由美もついていく合図だった。

今日初めて会つたというのにそのナンパ男達は昔からの友達の様に話しやすく楽しかった。

そして四人でたわいもない会話で盛り上がり上がっていた時ナンパ男の方が由美をつれて消えて行つた。

取り残された私ともう一人のナンパ男は由美達の事なんか気にせず、二人で話をしていた。

すると突然、男は、財布の中から小さなビニールのパックをとりだした。

その中には、ピンク色と、淡い緑の錠剤がふたづつ入っていた。

それがエクスタシー（人間崩壊・四時間の快樂）との出会いであつた。

男は、回りをきにしながらその錠剤のピンク色の方を一粒のんだ。男はニヤツとして私の唇を人指し指でなでながら無意識のうちに開いた口の中にそっと、もう一つのピンクの錠剤を含ませた。少し苦い味が口の中に広まつた。

私は何も抵抗しなかつた。

男は言つた。

『エクつてゆーの！俺たちの中ではこれの事神様つてよんでもるよー。君もエク好きなんだねえ』私はこのピンクの錠剤がエクスターという事を初めて知つた。『デモ、なんらかのヤバイ薬であることはきずいていた。それからすぐに男の家に行つた。男はソファーにこしかけて、『もうそろそろかな』と言つてニヤツと気持ち悪い笑みを浮かべた。その瞬間私はゾクつとして、体に少し力をいた。『エクは、飲んでから40分ぐらいしきまんないんだよ』シャブは、すぐにきまるけどね』『デモ俺はシャブよりエクが好き！』私はエクスターの話を長々と聞いていた。五分後、私の体にも異変が現れた。顎がガクガク震え始め、心臓がドクンドクンと脈うつた。もう体全部が心臓になつたように…視点はあわない…部屋にある家具やらなにやらがブルブル震えて見えた。すると、男は急に私に近づいて耳元で優しく囁いた『この薬をのむとね、セックスがまぢ樂しいよ』私は無意識のうちに服を自分から脱ぎ始めた。下着だけになつた私を男は舐め回すかのゆうに見つめた。たまらなくなつた男は、私のブラを片手で手慣れた手つきではなくと乳房をまるでオッパイをほしがる子供の様にすいあげ、自分もベルトをはずし、硬直した自らを私の顔にちかづけた。私はそれを口で愛撫した。して男は私の足を強引に開かせ、私の股に顔を埋めた。『あつ！…ああんっ！…んん…』私の幸せに満ちたあえぎ声が部屋にヒビイタ。もうびちょびちょになつた私の中に男は入り込んだ 私の中で

目が覚めると私は一人でベットに寝ていた。

男の姿はなかつた。

ふと辺りを見回すと、テーブルの上にかみきれがあつた。携帯番号

がかかれていてその下に、

「またほしくなつたらかけて」

と書いてあつた。

私はメモを半分におり、バックにいれた。  
体がすごくダルイ…喉が以上なほどかわく。

私は急ぎ足で男の家をでた。

五分後、由美から電話がかかってきた。

『昨日どうだつたあ？あの薬まちす』くない？！』由美は興奮して言つた。『エク？ 気持ちよかつた！ てか由美今ドコにいるの？』私は由美の異常なまでの興奮にとまどいながら話をそらした。『

通りの近くの アパートの一階の一一番左の部屋にいるよ！ 今からきて！』私はなにげなく『うん！』と言い重たい足取りで由美のいる場所へ向かつた。十分後、由美がいるアパートにつきいた。なんのためらいもなく由美がいるだろう部屋のドアを開け入った。『由美ー！！！』私は由美の名をよびながら、警戒しつつ部屋の奥へと入つていつた。すると後ろからイキナリ手首をすごい力でひっぱられた。私はびっくりして声もでなかつた。我にかえりとつさに後ろを振り返ると由美がニヤツと笑いながら私の手首を掴んでいた。『もう！ イキナリ何すんだよー』私はキレた口調で由美に言つた。すると由美は突然泣き崩れ、『ごめんなさい…』『ごめんなさい…』と叫びだした。私はいつもとは明らかに違う由美の様子に恐怖を抱いた。すると奥の部屋から背の高い女が現れた。女は私を見て二口つと笑いかけた。『初めまして！ あなたの名前は？』女は気さくに私に話かけた。私はなにも言えずに下をうつ向いた。『いいよー名前なん

て、「メン」「メン！」にいる奴らはみんなお互の名前知らないから』意味不明な事を囁つ女を私はじつとみつめていた。『まつ！とりあえずはいんなよ』女は一番奥のドアを開け手招きして、私を満面の笑みで招き入れた。私は部屋の中に足をふみいれた瞬間、息を飲んだ。

墓場だ：

## 優介との出会い

目の前には全裸でブルブルと震える女が倒れていた。女の腕には小さな赤いアザがいくつもあつた。

「シャブだ…」

私は心の中で呟いた。

女は虫の鳴くような声でブツブツと何か言っていた。そしてその女のすぐ隣には顔色の悪い男が一人ぐつたりと横になっていた。

骨と皮しかないくらい痩せ細り、全く生氣を感じられない。人間じやない…誰がみてもヤク中だつて解る…私は怖くなつた…シャブやらなんやらの薬物の存在は知つていたのだが、人間をここまで壊すなんて想像もつかなかつた。

そしてその男達と同じような女と男が奥の寝室で絡み合つているのが少し見えた。

私がその光景を無心に眺めていると、誰かが部屋に入つてきた。

『今日も売れた売れたら~』長身の金髪の少し眺めの髪の男がそう言いながら疲れた表情で私の隣にドカッと座つた。私は呆然と立ち尽くしたまま男を見下ろした。すると男は私の視線にきずき私を見上げた。『初めて見る子だね！かわいいね~俺、優介！よろしく』その男は笑顔で私に話かけてくれた。私もその男の優しい笑みに流れ無意識のうちにニコッと笑顔をかえした。『君もほしくて来たの？』男は私に優しく呟いた。私はなんの事かわからず困つた顔をして見つめた。『昨日エク喰つたろ？』『うん…』『だろ~バツチリきまつた？』私は小さく頷いた。すると男はポケットからアルミ制の掌ぐらいの入れ物をとりだした。『見てみろよ』私は中をみた。中身は全部エクスタシーだつた。ざつと一百錠はある。『俺売人なんだ』そういうと私は男に手を引かれ部屋をでていった。私はなんの抵抗もせず、男についていった。もう由美の事なんか頭になかつ

た。そして細い裏道を二十分ぐらい歩いただろうか…小さな古いアパートについた。男はアパートのドアを開け、私を招き入れた。どうやら男の家らしい。そして男はキッチンにむかいなにやら料理をはじめた。私はだまつてみていた。『俺の手料理食えるなんてお前ラツキーだなあ～』男は楽しそうに言つた。『何つくんの？』私は一コ二コしながら男に近寄つた。『できた！激うまホットケーキ』私は思わず、大爆笑した。見た目によらず案外こいつカワイイかも！そして男の作ったホットケーキを一人で食べた。

優介：これが貴方との出会いでした。

## しのびゆる影

その夜私は優介に抱かれた。

優介の背中には大きな女神が描かれていた。

その女神は俺にとつてエクスタシーの“象徴”と優介は冷えた目つきで言つていた。

朝を迎え私は優介の無邪気な寝顔を後にしアパートを去つた。

私は家に帰り由美の携帯に電話した。

何度もかけてもつながらない。

由美は一体どこで何をしているのか少し心配したが、あの“墓場”には行く勇気はなかつた。

由美の事だからそのうち連絡をよこすだらう… そう考へる事で不安はなくなつていつた。

私はベットの上で横になりながら優介の事を考えた。

あの刺青… エクスター… 私の頭の中は次第にエクスターの事でいっぱいになつていた。

『あの快感をもう一度味わいたい…』 私の鼓動は高鳴つた。明日、あのナンパ男に電話してみよう。私はどんどんエクの虜になつていった。依存という二文字がどんなに怖い事なのか知らずに… 直径約一センチ。私のからだに神様が溶けこむ時をただひたすら待つ。エクスターは神様。私は鏡に映つた自分を見つめた。

妙に血色が悪い。

掌には青白く血管がうきで、ドクン… ドクン… と脈うつてる。

私はいつもとは違う体の変化につすうす気づいていた。

だけど自分の体が壊れるという恐怖より、エクスターがしたい！

という欲の方がはるかにおおきく、恐怖はおし殺された。

優介の背中の怖いほど美しい女神がエクスターならば私はその女神を手に入れたい。

本当の快樂、極樂淨土、神様はエクスター。

私は洗脳されていく…でも、あの時気づいていれば、自分の自省心があればまにあつたのかもしれない。

私は急にひどい疲労に襲われ、そのまま眠りについた。

## 由美のみたもの

由美はあの“墓場”にいた。

由美はエクにすっかりはまり、快感を得るために何人もの男と交じりあつていた。

由美の顔つきはすっかりかわり、生氣は失われていた。  
そんな由美に想いをよせる男性…あの由美を連れていったナンパ男の礼一は由美を愛してしまっていた。

由美もやがて礼一の想いに気づき、次第に由美の気持ちは礼一に傾いていった。

『ずっと一緒にいよう』礼一はあの冷えきった墓場で由美にそつと呴いた。由美は目に涙を浮かべ、力なく首を縦にふった。エクスターに依存しきった男女は激しく愛し合つた。

「このまま時間がとまればいいのに…礼一と一緒にいたい…」  
由美は礼一にはまつていつた…そして次第にエクスターに対する依存は薄れていった。

由美は気づいた。

このままエクスターを続けても自分の体を壊すだけ…少しでも長い時間、礼一と一緒にいたい…将来、礼一と一緒になれたなら礼一の子供を産みたいから…幸せな家庭を築きたいから…

「あたしはエクをやめるわ」

由美の決断は固かつた。

しかし、礼一は違つた。

由美はエクスターを続けた期間が短かつたのと、彼女の強い意志があつたからよかつたものの、礼一はもうエクスターに依存しきつていた。

もう誰にも止められなかつた。

彼の理性は失われ、ただエクスターを体にとりこんだ…由美は何

度も何度も礼一の手からエクを奪い礼一をエクから助けだそうとした。

由美は見捨てなかつた。

最後まで…『礼一…愛してゐる。

あんたとはずっと一緒にいたいよ。』 そつまつと由美は礼一の手をひき外へでた。

『一緒にいれる場所はもうここしかないんだね…礼一愛してゐる…ずっと一緒にいつまでも離れない』

由美は礼一の手を固く握つた。

カンカンカンカン…

踏み切りはゆつくりおりた…

眩しい光が一人を包んだ。

由美は眩しさに目を細め笑顔で礼一を見つめた。

『ニュースをお伝えします。

昨晚未明、二人の男女が線路に飛び出し死亡しました。警察はこれを心中とみています。』

由美は一体何をみたんだろう。

エクスターに依存した礼一を助けられなかつた由美…礼一を愛した由美…礼一と供に今でも由美は生きています。

## 無くしたもの

私は由美の死を由美の死んだ翌朝、友達から耳にした。：

『由美が死んだ』

私は放心状態になつた。

なんで…由美が？そんなわけない！これは夢！つい数日前までバカして遊んでたのに…私は夢だ夢だと自分に言いきかせた。でもこれは現実だと由美の葬儀で確信した。

私は友達に支えながら由美の葬儀に参列した。

奥の方に由美の母親が見えた。

由美の母は私と目があうと、ふらついた足どりで私に近よってきた。  
「…由美、男の人と心中したのよ…由美、彼氏とかいたのね…由美、なんで逝っちゃったの？お母さんを置いて…ねえ、由美は何か悩みとかあつたの！？おばちゃん、由美の死んだ理由がわからないの！」

由美のお母さんは溢れる涙を拭いながら私に助けを求めるかのように泣きついた。

私は何も答えずにただ号泣した。

すると、由美の母の狂った泣き声に気づいた由美の父が慌てて走りより由美の母を支えながらまた奥へと消えて行つた。

由美の母の悲痛な叫び声はいつまでもやまなかつた。

由美の遺影を見つめた。

写真の中で笑つている由美は子供の様に無邪気だった…私の中で何かがプリンと切れた。

「ゆみいいいい！！！！！！ああああ…なんでだよ…？？なんでだよ！？…何があつたんだよ…？」

私は泣き叫んだ、まわりの友達は私をおさえつけた。

私は狂つたように泣き続けた。その後の記憶はない。

私は、夢を見た。

由美がいた。

いつもあいつは一緒にいた。

私は由美の泣き顔も笑った顔も全部知ってる。辛い事も悲しい事も由美がいたから乗り越えた。

大事な大事な友達はもう話す事もできなくなつた。

冷たくなつた私の宝物（由美）は、もう目をあけてくれない。

夢のなかの由美はいつものように私の手をひき、街を歩く…ガラスケースにならんだけアクセサリーと一緒に見たね。

そして、ペアのネックレスをお互いプレゼントしあつた。

私の胸元には今も小さく光っている。

喧嘩もいっぱいしたよね…でも朝になれば忘れてすぐになかなおりした。

でも…由美はもう思い出や夢でしかあえなくなつた…なんで由美は死んだをだらう…

『男と心中した』

男？…由美には彼氏はいなかつたし、それ以前に好きな男すらいなかつた。その事は私が一番よく知つていて。

じゃあ、男つて一体誰なんだろう…由美は何があつたんだろう…自殺するぐらい悩んでたのに、なぜ私に連絡もよこさなかつたんだろう？私は…何もしらなかつた…由美は私を頼らなかつた。頼れなかつた？…わからない…由美はもうなんにめ話してくれない。

## 繰り返す

由美が死んで一週間がたつた。

私は水分以外のものは何もとらず、部屋にひきこもっていた。頭の中は由美の事でいっぱいだった。

当然のようにいつも一緒にいた由美…昔からずっと一緒にいたのに…鏡に「写った私の顔はひどくやつれていた。涙はもうでてもこなかつた。

「きついよ…由美…」

部屋にはつてある一人で写った写真を見つめではそう呟いた。ベットによこたわると携帯がうるさくなつた。

由美が死んで以来、友達やら知人やらのメールがたえない。内容は全部、由美の事…

「大丈夫だよ！由美は遠い所から見守つてくれるから…早く元気だして！」

「由美の事なんだけど…何かあつたら私に言つて？」

「ねえ！きばらしに遊び行こう！」

「ちゃんとご飯食べてる？！最近みかけないけど…大丈夫？」みんなが心配してくれてたつて事は今になつてありがたい。だけどその時の私はそんな友人たちの励ましはひどくうざがつた。返事なんて誰にもしなかった。

そんなとき携帯の着信がなつた。静かな部屋に着信音が響いた。

優介…

優介から電話がかかってきた。私は思いだしたかのように電話にでた。

「もしもし…」

「あ…優介だけど、元気してる？」

「うん…」

「由美と一緒に死んだ男、あの時由美がついていったナンパ男だよ」

「え？…本当に！？な、なんで！？」

「死ぬほど惚れあつてたんじゃない！知らなーい！」

「おしえて！由美が…なんで！？…なんでよ…由美に何があつたの

…」

「だから知らないで」

「……」

「今夜あわない？」

優介の誘いは沈黙を破つた。私はふいに

「うん…」

と返事をした。

優介の声は私の空っぽになつた心になにか鋭くさざるようだつた。正直、優介とはあいたくなかった…でも、優介には何か断る事ができなかつた。

私はその夜、優介の指定したファミレスで優介をまつっていた。

一時間くらいまつただろうか、優介は呑気な顔で急ぐ様子もなく私に近よつてきた。

「久しぶり～ずいぶん顔色悪いな！大丈夫や？」

私は力なく頷いた。

それから一人で優介のアパートに行つた。

部屋に入るなり優介は私をベットに押し倒した。

私は抵抗せず、ただ優介のなすがままになつた。

優介は乱暴に私のスカートに手をいれ、下着の中をまさぐつた。

優介の荒い吐息が私の鼓動を高鳴らせた。

久しぶりに体中に熱が走つた。だけど…私は無表情に優介の行為をみつめた。

## 優介の傷

優介は私の股を乱暴に開かせ、あらわになつた私自身をみつめた。すると優介は立ち上がり、部屋の片隅にある小さな引き出しから何かをとりだした。そして私の方に向き直り、拳を開いた。

「エクだ」

私は興味なさそうに呟いた。

「飲め」

私は無心のままに優介からさしだされた小さなピンクの錠剤を呑んだ。優介もそれを呑んだ。

「お前、何で電話くれなかつたんだよ」

「なんとなく」

私のそつけない返事に優介はむすつとした。

「俺、お前は客にはしない」

「は?」

「俺、売人なんだけど、あのナンパ男みたいに街で適当な女ひっかけて、エク呑ませて、味覚えさせて客にすんだよ!だけどなんかお前は客にはしたくねーんだよな!」

優介はかまわず話を進めた。

「俺もお前みたいに大事な人を失つた事がある。…俺には家族が誰一人いねーんだ、俺が中学ん時、親も兄弟も死んだ…」

胸を刺されたように痛かった。

心がえぐりとられるようだつた。優介の深い悲しみは自然に私に伝わつた。

私の頬に涙が伝つた。

そして優介をひきよせ抱き締めた。

優介は小さく震えていた。私は力一杯優介を抱き締めた。沈黙が流れた…

「きいてきた。」

私は優介に呟いた。

優介はニヤッと笑い頷いた。

その瞬間、悲しみの沈黙は破られ、快樂の扉が開け放たれた。

心臓ははきだしそうなくらいに高鳴つて、視点はあわず、ブルブルと震えた。

二人の男女の息は荒くなり、静かな部屋に響いた。

喉の乾きはたえずいつまでも水分をとり続けた。

今までの悲しみが嘘だつたかのように私は笑顔で優介に抱きついた。

優介の胸の中は母のような安心感があった。

「優介といふとなんか落ちつく！」

優介は私の頭を撫で、ぎゅっと抱き締めた。

そして熱いディープキスを交した。

私の吐息はもうヤバイくらい荒い…二人の男女は衣服を脱いだ。

そして二つの裸体は激しく絡みあつた。

もう理性もクソもない。お互い激しく求めあつた。

エクスタシーと私と優介…優介に抱かれて、私は何度も何度も絶頂を迎えた。

揺れ動く視点は必死に優介を捕えていた。

優介は泣いていた：なぜ涙を流しているのかは気にならなかつた。やがて、優介は私の中で果てた。

白い液体が私の太股を伝つた。

だんだんとエクがきれていくのがわかつた。

水を大量に飲み、優介と寝そべつた。優介は私の髪を優しく撫でながらこう囁いた。

「愛してる」

その夜は優介の腕枕で眠りについた。窓から見える夜空は何か切なかつた。

朝が来て夜になり、夜が明けて朝が来る…それが何度も何度も繰り返していった。

優介の部屋の窓から見える日の出と夜空。

繰り返していく日々の中には私と優介と『エクスタシー』が在った。あの錠剤を何度も口にしただろうか、意識はもうろうとして、食事は一切知らない日々。

自分がわからなくなる

人が怖くなる

肉体が壊れる

幻覚、幻聴に脅える

理性がなくなる

死にたくなる

エクスタシーの効果が失われると、そんな恐怖感に襲われた。その恐怖から解放されるために、またエクスタシーを求めた。いつのまにかエクスタシーは生活の一部になっていた。  
しかし、エクスタシーは無限にあるはずもない、エクスタシーはそこをつきた。

「ない…ないないない！ない！！！何でだよ！」

優介はもう気が狂っていた。

部屋の中を探しまわり、棚から何から必死に探す。

部屋は廃墟みたいな有り様になつた。

そんな優介を見て怖くなつた私は、両手で耳をふさいだ。

優介の悲鳴は力一杯耳をふさいでも聞えた。ふと、夕陽のさしこむ窓に目をやつた。

「ああ…！」

窓ガラスに写る私の姿はひどかった。

ガリガリに痩せこけた肩、頬骨が目立ち、目がグリッピと浮き出でてい

る。

窓ガラスに写る自分と見つめあい、私の震えはもうヤバイくらいになっていた。

「私なの？」

あまりにも醜い自分の姿…これが現実。これがエクスタシー。

カーテンを閉めた。現実から逃げた。

何時間も部屋中荒しまわる優介に目をやつた。

私も一緒に部屋を探した。

あるはずもないのに、どこにあるという『錯覚』…探した探した探した…エクスター…そして朝を迎えた。

私は台所で寝ていた。まだ優介は探していた。

「エク、探さなきゃ」

そう思い起き上がろうとした瞬間…ひどい立ちくらみに襲われ、私は近くにあつた食器棚にもたれた、そして食器棚と一緒に倒れた。

「ガシャーン!!!!」

凄い音が部屋に響いた。そして、優介は急いで私のもとへ來た。

「ど、どうした？！大丈夫か？！お、おい！」

優介の声は微かに聞えていた。そしてだんだんと記憶は薄れていった。

## 失いたくないから

目を覚ましたのは二日後の朝だった。優介は心配そうに私の顔を伺つた。

「本当焦つたよ。エクはなくなるしお前は倒れるし。」

優介はそう言うと私をぎゅっと抱き寄せた。

私の胸は苦しくなつた。

お互い血色が悪い…エクのせい。

私は怖くなつた。

エクがしたくてしたくてたまらない自分に恐怖を抱いた。

エクスターは確実に自分の体を壊しているのに、症状は目に見えてるのに、こりす私の脳はエクスターを求める。

しかし、まだ私は自分自身を失つてはいなかつた。

エクスターを求めるために行動しない。

優介は一人、街へ出て行つた。

快樂を求めるために…優介の背中には鮮やかな女神の刺青…瘦せほそつた体にその画はふつりあいだつた。

ドアの閉まる音とともに私は正気に戻つた。

そして確信した。

優介を愛してる！助けなきや…由美はエクスターに奪われた…優介まで奪われたくない…もうこれ以上大事な人を失いたくない。

そう決意した。

心の底から決意した。

優介を止めたいのに、追いかけたいのに、立ち上がるうとしても足が弱つて無理だつた。

泣きじやくり、ただ優介…優介！と愛する人の名を呼んだ。

ようやく立ち上がれた私はヨロヨロと外へ出た。

優介を無我夢中で探した。

街には人が溢れていた。

空はやがて黒く染まり夜になつた。

どこを探してもみあたらなかつた。

優介のいつも行つていた場所は全部探した。

あの『墓場』にだつて行つた：もう私はただひたすら優介を探すだけだつた。

夜の街を走つた。

愛する人を失いたくないから。

でもいくら探しても優介はいなかつた。

それでも諦めず探し続けた。

そんな思いで優介を必死に探している最中だつた。

私の下腹部に締め付けられる様な激痛がはしつた。

私はあまりの痛さにその場に座りこんだ。

キリキリと歯をくいしばり痛みに耐えた。

激痛は止む事なくさらにましていつた。

かすむ視界には眩しい夜空が広がつていた。

優介も同じ景色を見ている。

同じ空の下にいると思つたら優介を必ず探しだせるとそう思えた。

私は痛みを押し殺し、優介をまた探しだした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1503a/>

---

エクスタシー

2010年10月9日20時11分発行